令和３年度　全国社会科教育研究大会　高知大会　研究発表資料より

地域と世界をつなぐ「主体的・対話的で深い学び」の創造
～ Ｗｅｂ会議を活用した，人と人，地域と世界を結びつける実践を通して～

教諭　上白石　修（鹿児島市立鹿児島玉龍中学校）

１　はじめに

鹿児島県中社研が継続して取り組んできたテーマに「地域を素材にした授業づくり」がある。「地域の現状から課題を見つけその対策を考える」「地域の歴史を通史との関係からその独自性・類似性をさぐる」など様々な方法で地域を素材にした授業づくりを図ってきた。また、「主体的・対話的で深い学び」という言葉が提唱されるはるか以前から，ディベートや模擬裁判など生徒の「深い学び」を実現するための「主体的学び」「対話的学び」の実現に取り組んできた。鹿児島県中社研としては、これら2つの歩みを大切にしながらさらにその研究を深化・拡大を図りたいと考えている。

２　研究主題について

（１）　「地域と世界をつなぐ授業の創造」について

世界は、グローバル化の流れと反グローバル化の流れの双方が存在している。経済効率を優先したグローバル化の流れは「アメリカ第一主義」やイギリスの「ＥＵ」離脱等,「理想」と「現実」は未だにせめぎあっている状況である。世界で起きているできごとは「国境を超える」問題でありながら「国境にこだわる」問題でもある。

さらに２０２０年は，新型コロナウィルスの感染拡大が、世界を一変させてしまった。多くの人がコロナ危機に対抗するうえで、国際協力の重要性を説いている。しかし、現実に起きていることは国際協力ではなく国家間の対立である。今、世界各国は「国家主権」と「自国民」を守る方向へと向かいつつあると言っても過言ではない。

もちろん「国境を超える」問題は新たな光も差している。2017年度のノーベル平和賞はＩCAN（核兵器廃絶国際キャンペーン）が受賞した。そこに日本のＮＰＯ等の取り組みが貢献していることは周知の通りである。この「国境を超える」問題や「国境の中の地域」の問題をどのように生徒たちと学びあえばよいのか。その答えの一つが「グローバルに考えローカルに動く」という言葉であろう。それは、遠い場所のことを身近なことにつなげて考え、また、身近な行動・実践を世界の動きにつなげるということである。

社会科の教育目標は言うまでもなく「社会認識の形成と市民的資質の育成」である。本研究においては「社会認識の形成」を「地域」と「世界」をつなぐ授業の創造によって実現したいと考えている。いかに自分たちの地域が世界とつながっているのかを学ぶ授業を創ろうとするものである。そのような「学び」を実現することにより「自分」と「地域」「世界」をつなげて考え、行動できる「市民的資質の育成」につなげていきたいと考えている。

（２）　「主体的・対話的で深い学び」について

社会科という教科が「何を学ぶか」という内容教科と位置づけられ「知識の詰め込み」であるという批判を受ける傾向にあることから、「主体的学び」が以前から重視されてきた。また、講義式授業に代表される、教師と生徒を個別に結びつける学習形態を，グループや学級の討論を通した「対話的な学び」に変えていこうという試みも「民主的社会の形成」という視点から同様に追求されてきた。

この「主体的学び」「対話的な学び」はそれぞれ別個に追求されるものではなく、それぞれの学びが効果的に組み合わされることにより、大きな効果を発揮するものと考えている。

鹿児島県中社研は、これまで「主体的学び」「対話的学び」を別個にではなく同時に追求してきたと言ってよい。模擬裁判やディベート、テレビ会議、電子黒板、タブレットの活用など、先駆的に取り入れてきている。動機は「興味・関心」の喚起であったかも知れないが、生徒にとっては「主体的学び」であり、「対話的学び」であった事に間違いない。

また、「個」と「班」と「全体」の活動をどう有機的に結びつけていくかも検討課題とされてきた。「話し合わせる意義とは」「意見の集約とは」等を追究し，「活動第一主義」になっていないかどうかという視点からの授業検討を忘れてはならない。

「主体的・対話的な学び」であれば「深い学び」となるか。「詰め込み」や「活動ありき」という批判を乗り越えようと鹿児島県中社研がこだわり続けてきた考え方に「内容知と方法知のバランス」というものがある。「主体的・対話的な学び」という表面・外形にこだわった「方法ありき」の授業づくりはしないということである。教師による優れた教材研究が存在し、その教材研究に基づいた「深い」教材内容作りが必要である。その「深い」教材内容に結びついた授業方法，つまり「主体的・対話的な学び」を模索していくということである。言い換えれば、「深い」教材内容に「主体的・対話的な学び」がつながる時、はじめてそこに社会科としての「深い学び」が実現できるのではないだろうか。では，「深い学び」とは何か。本県中社研の目標にあてはめて答えるならば「地域の課題を世界とつなげて考え、説明できること」と「地域や世界の課題解決に積極的に関わろうとしていること」と捉えている。

メインテーマである「地域と世界をつなぐ授業の創造」は「深い学び」につながる重要な教材内容である。その教材内容がより効果的に吟味された「主体的・対話的学び」と結びつくことにより、結果としての「深い学び」に到達できるものと考えている。

３　研究副主題について

実施年度	遠隔教育の分類	主な内容
1999年	学校間交流 離島⇔本土小規模	・環境問題に視点を当て，地域のゴミ問題にどう取り組むかを検討
2001年	学校間交流 本土⇔本土小規模 ＋専門家（高校生）	・地域再生に視点を当て，過疎地域の活性化プランについて意見交流 ・高校生実業家からのアドバイス
2003年	海外との交流 カナダ⇔本土小規模	・海外視察中の教師と生徒との交流 ・チャットと短時間のテレビ会議
2011年	海外との交流 メキシコ⇔市内中規模	・時差，異文化体験の学習 ・メキシコとの交流
2012年	当事者との交流 元島民⇔市内中規模	・北方領土問題解決の方策の検討 ・北方領土元島民との交流
2018年	専門家との交流 SD専門家⇔現任校	・持続可能な地域開発について ・日本とメキシコの専門家との交流

発表者が「テレビ会議」を活用した実践を始めてすでに20年以上になる。当初は，高価な専用のシステムを準備した上に，50分の授業で２地点間をつなぐのに，数万円の通信費がかかった。離島小規模校で，生徒の情報量や体験の不足を補う目的で研究し始めた遠隔学習は，大きな負担を伴うものであった。

近年のインターネット環境の改善で，現在ではｗｅｂベースの会議が主流となり，専用のシステムも特別な通信費も必要とせず，映像も音声も格段の品質を維持しつつ，安定的な通信環境の中，多くの授業に変革をもたらす存在となっている。

奇しくも昨今のコロナ禍によって，その実力が広く知れ渡り，「リモート授業」は，今やトレンドキーワードとなりつつある。もちろん，このような緊急時の学びを支える機器としてのweb会議の価値を否定するものではないが，あくまでも本研究での主眼としているのは，平常時におけるweb会議を活用した社会科の授業について，その効果や今後の可能性について，一昨年度の九州大会の授業をベースに，言及していきたい。

４　研究構想

（１）　研究仮説

地域と世界を結びつける課題に気づき，それを生徒自身が自らの問題として受け止め，その解決を目指して多くの情報に触れ合う過程で，web 会議を活用した，生きた教材としての当事者や専門家，同じテーマを持った生活環境の違う他者と，主体的で対話的な学び合いをすることで，より高次の思考や判断を伴う深い学びになるではないか。

（２）　研究内容

【１】　地域と世界を結びつける学習課題づくり

前述のように，その地域の課題が単にその地域限定のものとして存在することはほとんどなく，より広範な地域や国家間，国際間の課題として認識されなければならないのは周知の事実である。これは，地域の課題が持つ普遍性の問題であったり，逆に特殊性の問題を強調するものであったりする。つまり，生徒にとって身近な課題が，他の地域や諸外国でも起こっており，それがどのように扱われているかを知ることは，課題解決の重要な手がかりの一つとなる。しかし，学習者主体で捉えたときに，その課題の結びつきに，生徒の関心が寄せられなければ，主体的な関わりは生まれない。

これまで学習課題について，次の３つの視点を持ちながら設定してきた。

①　生徒が身近に感じられる存在と結びつける
　・知人　・年齢が近い　・距離が近い　・みんなで訪れた場所　・先生が昔住んでいた国　等
②　注目度や話題性，専門性と結びつける
　・テレビで見た　・とても有名　・ホットな話題　・その道の専門家　等
③　複数年を通じた交流を背景に結びつける
　・これまでにも交流した人や場所　・これまでに話をしたことがある　等

これらの中でも，特に重要視してきたのは③である。年間計画の中で，特に重視すべき課題を想定しつつ，できれば中学１年生から分野を貫き，継続してその地域を見つめ，そこに住む人々の営みに注目し，違いや共通点を見いだせるようにすることで，より深い学びにつながると考えている。

以下は，これまでの実践における，地域や世界を結びつけた課題の例である。

単元（題材）名	学習課題	上記「３つの視点」との関連
時差を考える	時差１４時間はどんな違いをうむか。	①先生がいたメキシコ　③いつもの家族
地方自治	どんなプランが地域を活性化させるか。	②高校生の実業家　①近くの学校の同級生
領土問題の解決	北方領土での共生を考える。	②元島民　③島の暮らしを聞いた
地方自治	鹿児島市の住み熟しを考える。	②SDGs の専門家　③過疎対策を教わった方

例えば，領土問題の授業では，中学１年生の地理的分野の領土問題で，北方領土を扱う際に，元島民の思いをビデオ視聴で触れ，その本人に直接インタビューする授業を行った。２年生の歴史的分野では，同じ元島民に，戦争体験を語ってもらった。これらの経験をもとに，人的な関係づくりが整ったところで，公民的分野で国際問題を考える際に，「北方領土での共生」をテーマにしたプランづくりで元島民に改めてプランへのアドバイスをもらうという授業を行った。ややもすれば，遠い場所の関心の薄い問題ととらえられるものを，身近な人の存在から親近感や共感に結びつけ，そこから課題の本質に迫るという実践である。

この例をとっても，方法論としての web 会議の可能性が見えてくる。手記，資料等から探ることがこれまでの主流であったが，それに加えて同期と双方向性がさらに課題を鮮明なものにしてくれる。

【２】　web 会議を活用した学び合いの類型化

文部科学省は，平成30年９月に「遠隔教育の推進に向けた施策方針」で，遠隔教育が効果を発揮しやすい学習場面や目的・活動例として，10のパターンに分類している。

これを参考に，これまでの社会科における実践をもとに，遠隔学習の環境を作り出す教育方法としての web 会議の特徴を以下のように，６つの項目に従って類型化した。

Ａ　目的は何か

①　生徒の情報不足，経験不足の補完
→離島小規模校等の生徒に交流や協働作業を通して学びを構成する。

②　専門的知見の導入
→学習内容に関する専門性を持った人物との交流によって，知識を補う。

③　類似性や特殊性の認識
→身近な事象の地域や国別の類似点や相違点の認識につなげる。

Ｂ　誰との交流か

①　生徒間の交流
ａ　一過性の交流学習
ｂ　継続性を持った合同学習
ｃ　プラン等を創り上げる協働学習

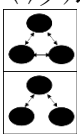
②　専門家との交流
ａ　一人の専門家との交流
ｂ　複数の専門家との交流

③　非同期による交流
→時差等で同期しにくい場合に，録画等を活用した交流

Ｃ　何地点間の交流か

①　二地点間
ａ学校⇔学校　ｂ学校⇔個人
ｃ個人⇔個人　ｄグループ⇔グループ

②　三地点間
ａ　完全な三者間交流
ｂ　二者の拡大型



③　多地点間
→　昨今のリモート授業はこの部類

Ｄ　交流のレベル

①　アイスブレーキング
→手を振る，挨拶，恥ずかしがり合う等

②　自己紹介，シナリオ等による交流
→形式に従った交流活動

③　放課後，休み時間等の自由な交流
→テーマや課題を越えた自然な交流

④　討論，プランづくり，創作等の活動
→シナリオのない，高次の議論やものづくりを伴う交流。

Ｅ　相手との距離，立場

①　同一地域や類似地域
→　近いけど，すぐには行けない

②　遠い国内
→　寒い地域と暑い地域など

③　遠い外国
→　国際理解や国際交流，異言語環境

④　相手への負担軽減
→　戦争体験者，障害者等との交流

Ｆ　情報のやりとりの度合い

①　完全な双方向性
→　対等に意見を交換可能

②　不完全な双方向性
→　講義式が多く含まれる交流

③　ほぼ一方向
→　いわゆる「ウェビナー」形式

学習内容や互いのインターネット環境，生徒や交流する相手の実態，また，このような遠隔学習への経験値の差などを勘案しながら実施すべきである。中でも特に大切にしたいのは，扱う教材の持つ価値を最大限に引き出す，web 会議の活用法を上記の類型を参考に選択していくことである。導入期では「とりあえず」つないで，その効果や課題を検証してみる。そして，実践を重ねる中で，その本質を引き出すべく，入念な教材研究とそこに導入すべき選択肢の一つとして，遠隔学習を結びつけながら，学習活動を展開していくことが大切である。

【３】　交流対象の発掘

実践にあたって，課題となるのが交流対象の発掘である。交流を求める学校や学級は意外に多いが，専門家の選定は，困難を極めると聞く。これまでの実践では，教材研究の過程で専門家に積極的にアプローチするところから始めた。また，日常生活で出会う人材に，「この方」と思った瞬間に授業構想を伝え，授業参加の約束をしてきた。現在も多くの私的人材バンクを持っている。Web 会議の特徴である移動費用や拘束時間の少なさで，賛同は得やすい。社会で活躍する多くの方が，生徒への成果の還元や交流を望んでいることを認知し，教材研究と共に積極的にアプローチしていくべきだと考える。

５　授業の実践（2018 年度九州地区中学校社会科教育研究大会での公開授業）

（１）　単元と考察について

【１】　単　元　名　　「地方自治と私たち」－鹿児島市の持続可能な活性化対策を考える－

【２】　単元の考察

鹿児島市は，人口 60 万の市民生活を支え，来訪者を楽しませる多様な都市機能が集積する南九州の中核都市として発展している一方で，少子高齢の進行や人口減少局面への移行，グローバル化，環境問題など，これまで経験したことのない変化が急激に進み，大きな転換期を迎えている。市内全域を校区とする本校では，過疎，高齢化や戸建ての住宅団地での子どもの減少，マンションでの生活で経験する住みにくさなど，生活環境の違いがあるからこそ，地方自治の課題が日常的に学級内で話題となっている。一方で，鹿児島市の抱える課題解決に積極的にかかわろうとする意識は低い。そこで，「鹿児島市の住み熟（こな）し」をテーマに，専門家との交流をもとに，自らが汗を流し，実行に移せる活性化の方法を検討していく。

専門家にはweb会議で参加してもらい，両者間はつながない２者間の２地点で実践した。県内の過疎対策の実践者とメキシコの SDGｓ研究者である。地域活性化の実践者である豊重氏は，メディアでも取り上げ下られる著名人であり，中学２年生の地理的分野での学びから継続して支援してもらうなど，生徒にとっても身近な存在である。研究者は，日本の大学で建築学を専攻し，メキシコの地方大学でSDGｓの研究と学生への教鞭をとっており，日墨両国の地域活性化への造詣が深い。

【３】　単元の構成

時	題	学　習　活　動	指　導　上　の　留　意　点	評価の方法
1	地方の政治と自治	・ ポストテストによって前時までの学習内容を確認する。単元の流れを確認する。 ・ 市の広報誌を見て，地方自治の意味に関心を持つ。 ・地方議会と首長の役割について説明を聞く。	・ 前時までの定着状況を知り，形成評価に役立てる。 ・ 地方自治の課題を振り返り，活性化について追究することを知らせる。 ・ 国会･内閣との関連から議決機関や執行機関を捉えさせる。	広報誌などの活用の状況を観察する。 ワークシートへの書き込み状況を確認する。
2	地方の政治と住民参加	・ 地方分権の意味を資料から読み取る。 ・ インターネット（総務省）で地方分権一括法に触れ，地方分権の動きをつかむ。 ・ 地方財政と住民自治について説明を聞く。	・ 中央集権的な体制の課題との比較を通して理解させる。 ・ 地方分権一括法の読み込みでなく，意義に注目させる。 ・ 「三割自治」について具体的な資料をもとに理解させる。 ・ NPO の活動を紹介する。	グループ討議で身近な問題を発表させる。 ワークシートへの書き込みやメモの状況を確認する。
3	持続可能な町づくりを考える	・ 自分にとっての魅力ある「住み熟せる」町とはどんなところか，考える。 ・ 自らの指向と合致するカテゴリーを選び，議論を深める。 ・ 議論を通じて，具体策を考え，その提案先も検討する。	・ 持続可能な町づくりを「住み熟し」と捉え，どんな町なのかを考え，現状との違いを述べさせる。 ・ 生徒の意見をもとにカテゴリー分けし，グループで討議させる。	グループの協議の様子を記録から読み取る。 「総合計画」の読み取りの状況を観察する。
4（本時）	テーマに応じたプランづくり	・ 前時までのプランの内容をグループで再確認する。 ・ 専門家への質問を行い，プランの改善案を整理する。 ・ 自分のグループに戻り，専門家からのアドバイスをプランに反映させる。 ・ プランの練り上げを行う。	・ 専門家との交流を意識させながら，プランの課題を整理させる。 ・ ＴＶ会議を使い，専門家との意見交換を行わせる。 ・ プランへの反映に苦慮しているグループを支援する。 ・ 活動が停滞しているグループを支援する。	発表や交流活動への参加状況を観察する。 ＷＢへの書き込みに注目し，練り上げの状況を確認する。
5	プランの完成と提案	・ 「プラン」を発表し，評価する。 ・ 地方自治において自分にできることについて考え，まとめる。 ・ 次時の具体的な提案に向けて，提案先の選定と準備を進める。	・ 「プラン」を掲示し，全員の意見に触れさせる。 ・ 他人事とせず，自らの行動プランの具体化と提案先の整合性を考えさせる。	いくつかのプランを取り上げ，提案の新規性や可能性を確認する。 ワークシートへの書き込み状況を確認する。

【４】　本時の展開

過程	学　習　活　動	形態	指　導　上　の　留　意　点	評価等
導入 7’	1　鹿児島市の再開発に関する質問に答える。 2　本時の学習課題を確認する。 〈学習課題〉 鹿児島市の「住み熟し」をどう実現すべきだろうか。 3　みんなの考えているプランを知る。 4　今日のゲストティーチャーに挨拶をする。	班 一斉 一斉	1　「五次総合計画」や「サステイナブル」等，本時の学習課題につながる発問をする。 2　自らが考える地域の活性化，持続可能性の追求を目標として行くことを確認する。また，評価の観点と規準についても理解させる。 3　現時点での生徒のプランを公表するが，問題点の指摘を急がず，カテゴリーに応じた柔軟な思考をするよう促す。	理解 （質問） 関心意欲 （観察）
展開 37’	5　以下のカテゴリー別に，質問内容や相手を確認する。（案） A　年代別住み熟し　B　空き屋活用 C　観光客リピート　D　市街ビル活用 E　家族・地域資源　F　産学地連携 6　３つの質問ブースの位置づけを確認し，各グループの代表が質問に行く。 7　質問内容を班に持ち帰り，自分たちのプランを練り上げる。 8 班内で出た新たな疑問について，改めてブースに質問に行く。 9 改善された案をホワイトボード等に書き，概要を簡単に説明する。 10 ゲストティーチャーの意見を聞く。 11　ゲストティーチャーのアドバイスを受け，次時に向けて内容の確認と提案先の検討を行う。	一斉 ジグソ 班 ジグソ 班 一斉 班	5　各グループの内容をホワイトボードで確認した上で，簡単に視点を示しながら，質問のアドバイスを行う。 6　３つの質問ブースを以下のように位置づけ，各代表が質問する内容について，事前に概要を確認した上で，受け身にならないよう指示する。 ①　教師　②　SDGｓ研究者<T> ③　豊重公民館長<T> 7　意見を単に受け入れるだけでなく，批判的な思考と創造性を持って改善にあたらせる。 8　さらに具体的で，提案性のあるものに仕上げられるよう，各班で議論を深めさせる。 9　ＩＷＢを活用しながら，視覚的に共有しやすくなるように支援する。 10　ゲストティーチャーにアドバイスを頂く。単にプランの評価だけでなく，持続可能性や人材活用等の視点を組み入れ，次時の提案につなげる内容になるよう配慮をお願いする。 11　アドバイスの要点を押さえながら，活動が深まらないグループの支援に当たる。	表現技法 （観察 .相互評価） 思考判断 （観察添削） <T>はweb会議使用 関心意欲 （観察） web会議使用 思考判断 （観察添削）
終末 6’	12　先生の話を聞く。 13　次時の内容の確認をする。	一斉 一斉	12　持続可能な町づくりについての教師の考えを聞くと共に，ゲストへの謝意を示す。 13　次時で「プラン」を最終確認していくことで，政治分野のまとめをすることを説明する。	全体評価 WBでの共有による提示

【５】　研究の成果と課題

授業後のアンケートでは，全生徒が深い学びになったと答えた。最も影響を受けた場面を問うと，「web 会議」が４０％を超えた。web 会議と同等に友達との対話が影響力を持っていたことから，日常の討論や議論の充実がいかに有効かを実感した。また，海外との度重なる交流の結果，その抵抗感が減り，海外との友好関係を結ぼうとする態度が見られるようにもなったことも，グローバルな視点を育成するうえでの大きな成果と言える。さらに，事前のゲストティーチャーとの授業づくりで，教師自身が学びを深める機会となった。今後，主体的，対話的で深い学びの創造のためには，教師にとっての授業づくりの協働者の存在も不可欠である。Web 会議はそれを十分に叶えてくれる。

課題は，生徒の身近な問題に対する課題意識が低く，導入期でなかなか考えを深められなかったことである。日常的に，学習内容と身近な問題との関連性を指摘しつつ，視点を持たせることの重要性を実感した。また，最終的なプランづくりに際しての表現力の乏しさも感じた。話すことだけでなく，考えをまとめる構成的な表現の技法も身につけさせる必要性を感じた。

今後は，web 会議が一単位時間のメインの方法論ではなく，教室内に置かれた学びの道具の一つと位置付け，生徒が授業の目的によって，主体的に操作，活用していく授業を展開していきたい。